慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	百合と星と：ハワード・パイルの『シャロットの女』について
Sub Title	Stars and lilies in Howard Pyle's "The lady of Shalott"
Author	高宮, 利行(Takamiya, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.228(145)- 240(133)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0240

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

百合と星と

― ハワード・パイルの『シャロットの女』について

髙宮　利行

1

アメリカ合衆国の東部にデラウェア(Delaware)という小さな州がある。わが国では赤みがかった小粒のブドウの品種として馴染みある名前であろう。このデラウェア州にウィルミントン(Wilmington)という小さな町がある。小さくとも州都であるその町の閑静な住宅街の一角に，デラウェア美術館(Delaware Art Gallery)が建っている。さほど大きくない美術館だが，ラファエル前派の多くの傑作絵画があるので国際的に知られている。イギリス以外では，ハーバード大学フォッグ美術館と並んで，ラファエル前派のすぐれた恒久コレクションを擁する美術館といえよう。このコレクションは，ウィルミントンで製棉工場を経営していた父親の下で働き，後に成功した実業家サミュエル・バンクロフト, Jr.（Samuel Bancroft, Jr., 1840 – 1915）と彼の残された家族が収集したものである[1]。ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti) の『レディ・リリス（*Lady Lilith*)』,『ヴェロニカ・ヴェロネーゼ（*Veronica Veronese*)』,『ラ・ベラ・マーノ（美しい手，*La Bella Mano*)』,『ムネモシュネー（*Mnemosyne*)』，またエドワード・バーン=ジョーンズ(Edward Burne-Jones)の『女修道院長の話(*The Prioress's Tale*)』など，絢爛豪華で官能性の強い絵画は，美術館のラファエル前派の部屋を訪れる人々を圧倒する。

しかし，これに続く部屋には，挿絵画家で作家ハワード・パイル（Howard Pyle, 1858 – 1911）の作品が数多く展覧されている。本稿では，ウィルミントンに住む人々のみならず，古い世代のアメリカ人なら決して忘れられない

パイルが，1881 年にカラー挿絵を描いて出版したテニスンの『シャロットの女（*The Lady of Shalott*）』を取り上げる。まず手始めに，彼の生涯について略述しよう。

ハワード・パイルは 1853 年 3 月 5 日，ウィルミントン郊外に住む中産階級の毛皮商人ウィリアム・パイルとその妻マーガレット・チャーチマン・ペインター（Margaret Churchman Painter）の唯一の息子として生まれた。両親はじめ先祖は代々この地方に多いクエーカー教徒であった。家には英文学の書物がたくさんあった。まもなく父の事業が不況に見舞われたため，一家は生家を手放して市内に移り住んだ。ハワードは，地元のクエーカー教の私立学校で学んだ後，3 年間フィラデルフィアとニューヨークで絵を学んだ。メトロポリタン美術館では，ウィリアム・ホガース（William Hogarth）や初期のドイツの巨匠たち，とりわけアルブレヒト・デューラー（Albrecht Dürer）の版画に関心を示した。とりわけデューラーの装飾線を強調する技法はパイルに強い影響を与えた。

1881 年には地元ウィルミントン出身のアン・プール（Anne Poole）と結婚し，最初の 1 年間に 100 点以上の挿絵を描いた。ふたりは，結婚生活のほぼすべてをウィルミントンで過ごした。当時その地域に広がっていた田園地方のもつ雰囲気と，クエーカー教徒としての神秘的で空想的な傾向は，彼の挿絵にも投影されている。

1876 年に最初の挿絵が旧『スクリブナーズ・マガジン（*Scriber's Magazine*）』に発表され，翌年には『ハーパーズ・ウィークリー（*Harper's Weekly*）』やアメリカ国内有数の子供向け雑誌『セント・ニコラス（*St. Nicholas*）』に掲載されたが，それ以来パイルは自作の物語や挿絵の数々をニューヨークで発刊される一流誌に寄稿し続けた。最初の成功作『ロビンフッドの愉快な冒険（*Merry Adventures of Robin Hood*）』（1883）で，彼のペン画による挿絵は大きな人気を博し，英米両国で各種の版が作られて，画期的な売れ行きを示した。1880 年代半ばには，同じ英語圏であるイギリスからの影響を脱したアメリカ独自の挿絵画家としての彼の名声は，揺るぎないものとなった。例えば，画家ヴァン・ゴッホ（Van Gogh）も，兄弟に宛

てた手紙の中で，パイルに言及したほどである[2]。1894年には，パイルはフィラデルフィアのドレクセル研究所（Drexel Institute）の挿絵部長となり，同じ頃ウィルミントンに美術学校を開設した。また夏を過ごしたペンシルヴァニア州チャッズ・フォードでも教えた。昔ニューヨークで通った美学生連盟（Art Students' League）でも，週に一度の講義を受け持った。パイルの教え方の主眼は，生徒が自由な創造性と想像力を養うのを手助けすることに置かれていた。その結果，教え子の中からは次代を担う挿絵画家やN. C.ワイエス（Wyeth）のような画家が100名以上も育っていった。パイルはナショナル芸文協会（National Institute of Arts and Letters）やナショナル・アカデミー（National Academy）の会員となった。

1910年11月，家族とともに初めて海外旅行をしたパイルは，一年間フィレンツェに滞在したが，翌年11月9日に同地で客死した。

さて，パイルの作品のオリジナルはほとんどすべて，デラウェア美術館に収蔵されている。ウィルミントン美術協会（The Wilmington Society of the Fine Arts）が1921年に出版した『ハワード・パイル — 挿絵と著作の記録（*Howard Pyle: A Record of his Illustrations and Writings*）』（1969年再版）によれば，自作の本文を含む書籍34点に描いた挿絵が574点，また他の作家の作品159点に描いた挿絵が588点，ほかに再版時のものがあり，これはおそるべく数字といってよいだろう[3]。また，パイルの死後『ハーパーズ・マガジン（*Harper's Magazine*）』の1912年1月号に寄稿したヘンリー・ミルズ・オルドン（Henry Mills Alden）は，「すべての事物の内的な精神的な意味を追求した」パイルをウィリアム・ブレイク（William Blake）に比較して論じたほどであった。

19世紀後半から，読書が子供たちや少年少女の重要な娯楽としての地位を確立した。それまでの食後の団らんのひとときに暖炉の前で親が小説や詩を読み聞かせる習慣から，こどもたちが自ら本を所有して，本文を読みながらもそこに図像化された挿絵から思いを馳せるといった読書体験に変化した。これは英米を問わず，図版印刷術の発達と読み書き能力の向上によってもたらされていった。パイルの絵本の出現はこの潮流に乗った，時宜にかな

うものであった[4]。

2

1881年，ニューヨークのドッド・ミード社（Dodd, Mead and Co.）は，子供用の小さな作品2点，『シャロットの女（*The Lady of Shalott*）』と『ヤンキー・ドゥードル（*Yankee Doodle*）』に挿絵を描くようパイルに委嘱した。これらは，ページ数こそ少ないが，一巻すべてに絵を描いて，子供向けに全ページをカラー印刷するという，アメリカの出版界でもあまり試みられたことのない野心的な企画であった。もちろん高級感のあるギフト・ブックとして企画されたので，古書市場で高額で取引される現存本の遊び紙には，誕生日やクリスマスのプレゼントとして贈られたことを示す献辞が付されている場合が多い。なお印刷部数についてはつまびらかではない。

イギリスには当時エドマンド・エヴァンズ（Edmund Evans）がおり，ウォルター・クレイン（Walter Crane），ケイト・グリナウェイ（Kate Greenaway），ランドルフ・コルデコット（Randolph Caldecott）などの人気挿絵作家の子供向け作品をカラー印刷で出版して，江湖に迎えられていた。パイルは，このエヴァンズの平坦なカラー印刷の向こうを張ろうとした。しかし，彼はこの先駆的な試みの結果に不快感を示した。ひとことで言えば，エヴァンズの出版物のレベルに達していなかったからである。コルデコット風の『ヤンキー・ドゥードル』には何とか見られる面もあるが，『シャロットの女』は完全な失敗だったというのが，パイル自身の感想だった。イギリスで流行していたウォルター・クレインの流れるようなアール・ヌーヴォー様式を採用したのだが，これはパイルの様式ではなかったのである[5]。

アルフレッド・テニスン（Alfred Lord Tennyson）のアーサー王詩編『シャロットの女』が，同時代や後代の画家や文人，音楽家に与えた影響ははかりしれないが，紙幅の都合上ここで詳述することはかなわない[6]。『シャロットの女』は1832年の若きテニスンの『詩集（*Poems*）』に収められたが，批評家から酷評を浴びせられた結果，その後テニスンは1行の詩も公にしなか

った。雌伏 10 年の後に出版された改訂版『シャロットの女』は，ヴィクトリア朝社会でのアーサー王伝説復活の波にも乗って，次第に世に受け入れられていった。当時の社会における女性の地位を象徴するような内容と，暗唱するのにも手頃な短さ，何にもまして 1850 年に詩人が桂冠詩人になったことなどが相俟って，本詩の人気も高まっていった。画家たちもこぞってこの作品を絵画化していった。物語は次のような粗筋をもつ。

アーサー王の宮廷キャメロットに向かって流れる川の，シャロットの中州にある塔の一室で，閉じこめられた女が日夜機を織っている。シャロットの女には外を見てはならぬという呪いがかけられており，眼前の神秘な鏡に映った外界の出来事を一日中織らなければならない。初めは呪いなど気にもかけず，仕事に精を出していた女も，結婚したばかりの若い男女の姿を見ると「もう影の世界はうんざり」という。

そこへ勇ましい甲冑姿のランスロットが馬で通りかかったため，シャロットの女はたまらず窓に駆け寄って，禁を破って外を見てしまう。すると織っていた機はほつれて宙に漂い，鏡にはひびが入る。

「呪いがかかった」と叫び，塔から水辺に降りた女は，小舟の船首に名前を記し，身を横たえる。川の流れに身を任せた女は，最期の歌を口にして息絶える。

夜のしじまをキャメロットに漂着した女の亡きがらを見て，皆は畏怖にとらわれるが，ランスロットはしばし黙考してから口を開く。「この女は見目麗しい。神が女に恩寵を与えますように」。

さて，『シャロットの女』に挿絵を施して出版された中で，もっとも有名なのはエドワード・モクソン（Edward Moxon）の編集による 1857 年のテニスン詩集に含まれた，ウィリアム・ホルマン・ハント（William Holman Hunt）とダンテ・ゲイブリエル・ロセッティによる 2 点であろう。ハントは禁を破った女に呪いがかかって鏡が砕け飛ぶ場面を，またロセッティはキャメロットに漂着した女のなきがらをのぞき込むランスロットの姿を描いた。しかし，既に 1853 年には，ロセッティの恋人エリザベス・シダル（Elizabeth Siddall）がハントと同一の場面を，冷静に激情を避けた扱いで描いていた(7)。しかし，その前年の 1852 年には，『シャロットの女』の全編

に氏名不詳の女流画家が素朴な挿絵を単色で描いた版が，ノッティンガムで出版されている。少し前に流行していたジョン・フラックスマン（John Flaxman）の様式を思わせる挿絵が多い。この出版は，テニスンの詩が改訂版の出版後 10 年にして，人口に膾炙していたことを示す証拠になろう[8]。

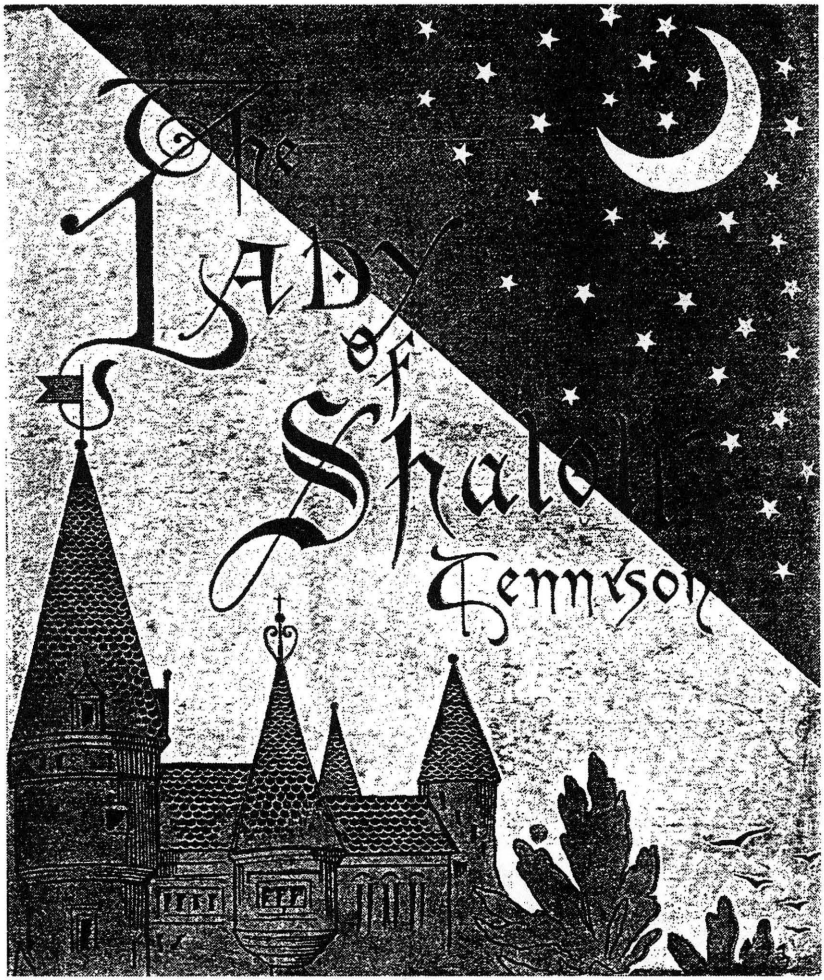


図 1

その後，『シャロットの女』に影響を受けて，ヘンリー・ピーチ・ロビンス

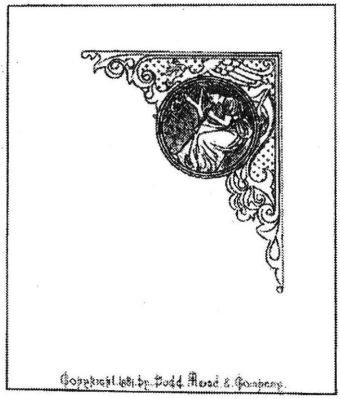
ン（Henry Peach Robinson）が小舟に横たわる女を黒白写真に撮った作品（1861）も生まれた。同名の油彩も多く，その影響はアメリカにも飛び火して，ジョン・ラ・ファージ（John La Farge）が描く死せるシャロットの女（1862 頃）などを生んだ。当時のアメリカやカナダにも多くのテニスン愛好者がいたことであろう[9]。

こういった背景の中で，ハワード・パイルの『シャロットの女』の出版が企画されたことは疑いない。テニスン詩集の一部としてシャロットの女に挿絵が施されることは多かったが，『シャロットの女』を単独に取り上げてその全編に挿絵を入れた 1881 年のパイル版は，ノッティンガムで少部数で出版された 1852 年の版に次ぐものである。そして全ページのカラー印刷本としては嚆矢といってよいだろう。パイル版『シャロットの女』に関する言及は従来きわめて少ないので，以下に詳述を試みる。

パイルの『シャロットの女』は，23.4×21cm の方形に近い四折り版の版型をもつ。この版型自体がエヴァンズが印刷した『ベイビーのオペラ（*The Baby's Opera*）』（1877）などの一連の出版物に用いられたものに近い。もっとも後者のサイズはより小型だが，『シャロットの女』の装丁は茶色のクロス装で，中央に The/Lady/of/Shalott./Tennyson と黒色の手書き風の装飾文字が印象的である。[図 1] 左上から右下に金線が斜めに入って，デザインを二分する。左の部分は金地の空にそびえる城の尖った塔，その右に木々越しに羽ばたく 5 羽の鳥，右上には満天の星と三日月があしらわれている。見返しには，細かい葉と花（または実）が茶緑の地に印刷されている。

本書にはページ付けが施されていない。本文と同じ薄茶色の分厚い紙質の遊び紙一枚の後，ハーフタイトルのページ [1] には，左上と右下に一つずつ円形のヴィニェットが描かれ，円の中には白百合の花が見える。こういった趣向は，ロセッティ以下ラファエル前派の芸術によく用いられたもので，クレインの挿絵，エヴァンズの印刷で出版された『ベイビーの花束（*The Baby's Bouquet*）』（1878）のハーフ・タイトルの裏にも現れる。つまり，そこでは左上と右下に一つずつ円形のヴィニェットが描かれ，円の中にはたんぽぽの

写本に見られる装飾文字に近いスタイルで描かれている。赤い目と赤い脚をもつグロテスクな大蛇がTを形成している。これは線描の上に水彩を施すというやり方であった。[図 2]　タイトルページの裏には，右上に描かれた赤の装飾線の中に円が置かれ，そこでは木の下で長衣の女性が身を屈めるようにして縦笛を吹いている。[図 3] ここには女流挿絵画家ケート・グリナウェイによる『ハメルンの笛吹き』などからの影響が一目瞭然である。一重枠の下線の上には Copyright.1881.Dodd.Mead.&.Company.の文が黒で書かれている。



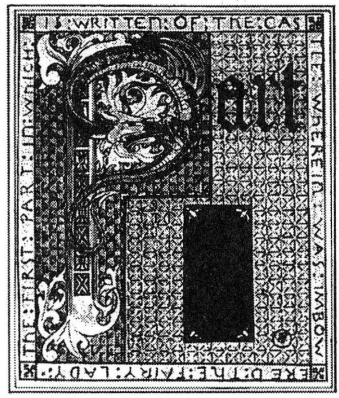


図 3

これに続く本文では，四部に分かれた 1842 年版の詩を，順に 1 スタンザずつ挿絵と詩行で見開き 2 ページを原則として綴っていくわけだが，まず第 1 部についてはその内容を説明する文 THE: FIRST: PART: IN: WHICH: IS: WRITTEN: OF: THE: CASTLE: WHEREIN: WAS: IMBOWERED: THE: FAIRY: LADY を二重枠の内側の黄土色の地に赤で書いている。[図 3] その内側の Part I は赤字に黒の I が鮮やかで，他は緑と黄を組み合わせた文様と，大胆な装飾大文字 P には大蛇が絡んでいる。ここには明らかにウォルター・クレインの影響が色濃い。本書全体を通して黄色と緑の色調が基本的に用いられているが，これはラファエル前派の画家たちが好んだ色であるし，世紀

ごとき花が見える。

ハーフタイトルの裏には二重枠の黄土色の地の左上には円の中に Dodd/Mead &/Company/Publishers/New York と大文字は赤でその他は黒で書かれている。[図 2] 右下の円の中には，先が渦巻く長い髪の乙女の左向きの横顔が描かれ，乙女の左耳には大きな星がついて輝いている。これは，ロセッティの『至福の乙女（*The Blessed Damzel*）』（1875－78）に描かれた乙女の長髪に，星がまとわりついている姿を思い起こさせる。パイルの円の上部には白百合が一本上に伸びて，花が二つ付いている。『至福の乙女』では，乙女が三本の白百合を胸に抱いている。本書における白百合の多用は，シャロットの女の処女性を象徴していると考えられる。幹の左には Decorated.by./Howard. Pyle.といささかゴシック書体風に書かれている。二重枠の下には Lith:by:Brett: Lithographing:Co:N:Y:という表現が見られる。従来は，本書の印刷技術に関しては「紙への機械による再現方法は未詳（Unknown method of mechanical reproduction on paper)」（*Ladies of Shalott*, p.137）とされてきたが，明らかに多色石版刷りであった。

次にあるタイトルページは，前ページと同じく黄土色の地に The./Lady.of./Shalott.と書かれているが，大文字のTは左斜め上のスペースを用いて中世

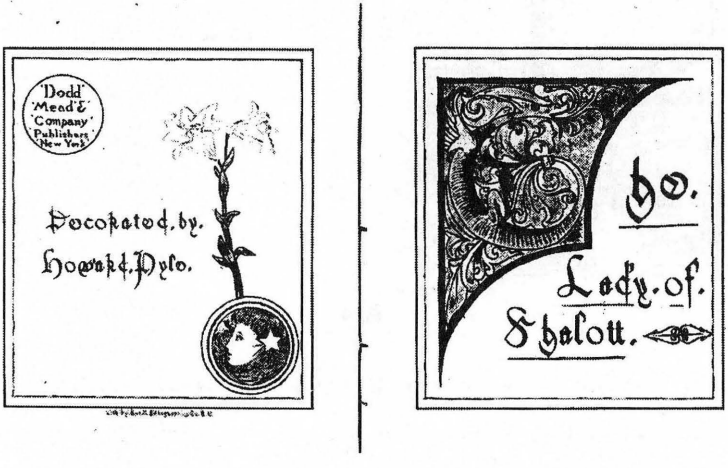


図 2

末に流行したアール・ヌーヴォー様式の特徴でもある。右隅に描かれた円内に書かれたモノグラムは，HとPの頭文字を組み合わせた意匠だが，これまたロセッティ以降の多くの画家が用いた流行を踏襲したものである。この後の全ページ大の挿絵には，このイニシャルの組み合わせが必ず用いられている。

次の見開き2ページでは，右にネオ・ゴシック風の印刷文字フォントによる第1スタンザの詩行を印刷する一方，左では第1スタンザの本文9行を手書きで表現するとともに，ト書きのように A・DESCRIPTION・OF・THE・CASTLE と書き入れている。[図4] このページの右斜めには，地には城を背景に歩む若い男女を配し，左斜めには中世写本を模した意匠が用いられている。このページに限らず，本書で本文を手書きしている箇所では，残念なことに，黒の本文が地の背景とぶつかりあって，互いの長所が相殺されてしまっている。この点こそパイルにとって計算外の失敗といえるのではないだろうか。

図4

これに続く見開き2ページでは，第1スタンザに描かれた場面を詳しく説明すべく，左には The: people: passing: the: island を具体的に図像化している。次の行 Gazing where the lilies blow に現れる lilies は白百合として描

かれているが，これは後に言及されるwaterlilies，つまり睡蓮と解釈すべきであろう。実際パイルは，白百合をシャロットの女を象徴する花として用いているようで，右ページのTHE: FAIRY: LADY: OF: SHALOTT: IN: THE: SPACE: OF: FLOWERSにも描かれている。

このようにして，実に綿密に全編に渡って，スタンザ毎の詩行と色とりどりの挿絵が組み合わされて展開する。そして最終スタンザの本文の前のp. 58では，多くの男女が群がる中で若者が片膝をついて，漂着したシャロットの女の顔をのぞき込んでいる。次のp. 59では蒲の穂の中央に円形ヴィニエットが施され，その中では喪に服したかのような頭巾姿の女性が目を閉じてうつむいている。彼女の頭の後方に隠れて一部だけが見える三日月は，上方に光る大きな星と呼応する。

興味深いのは，62ページには冠を戴いたランスロットとおぼしき人物が，死せるシャロットの女を，やはり跪く姿勢で，左手の人差し指をこめかみにあてている。

p. 63にはThe end: と大書きされている。p. 64の中央には三輪の今度は赤い百合の花が満開で描かれ，その下の円形ヴィニェットには，白い透明なヴェールを風になびかせた若い女性が右を向いてじっと目を凝らしている。青い背景には大きな黄色い星が見える。パイルはシャロットの女の変容の象徴として，白百合から赤い百合への変化に託したのであろうか。

3

ハワード・パイルの『シャロットの女』が，ウォルター・クレインの挿絵芸術の影響を強く受けていることに疑いはない。クレイン自身も，パイルがより画家のような様式で描くようになる以前の作品が，自分のものにかなり近いとして賞賛していた。もっとも，クレインがパイルの『シャロットの女』について直接言及した記録は，残念ながら残っていない。1882年に渡米したクレインは，アーツクラブでの自作の展覧会の開会式のおりに催された晩餐会で，アメリカの雑誌を見て敬愛していたパイルに会えてよかったと，自

伝に書き記している[10]。実はクレインが1858－59年に描いた『シャロットの女』の水彩画（19.5× 14.2 cm）のセット全18点が，ハーバード大学アーサー・ホートン（Arthur Houghton）図書館に収蔵されている。わずか13歳の時の作品だから，もちろん習作の部類に入る。未完の作品で，図像化されたシャロットの女が一堂に会したブラウン大学での展覧会 Ladies of Shalott（1985）でも取り上げられなかったし，スペンサーの研究書（1975）に一点がカラーで復刻されているのみである[11]。ここで興味深いのは，一見して分かるように，クレインの挿絵はその直前に出版されたモクソン版テニスン詩集（1857）の影響を全く受けていない。むしろそれ以前の巨匠ブレイク，ジョン・ギルバート（John Gilbert），ダニエル・マクリース（Daniel Maclise），中世主義者オーウェン・ジョーンズ（Owen Jones）らの芸術から受けたインスピレーションの跡が著しい点である。クレインはその後の徒弟時代になって，同書をはじめラファエル前派の作品に大きな影響を受けたのである。クレインの『シャロットの女』は，知人の紹介でジョン・ラスキン（John Ruskin)に見てもらう機会があった。ヴィクトリア朝最大の美術評論家は，若きクレインの色使いに関して好意的な評価をくれたという。これに対して，当時活躍していた彫板師ウィリアム・ジェイムズ・リントン（William James Linton）は，クレインの作品におけるデザインの見事さに感心して，すぐさま弟子にとることを了承したという[12]。上述した経緯から，パイルが制作した『シャロットの女』のカラー挿絵版には，クレインからの影響はみられるものの，クレイン自身の『シャロットの女』の影響は認められない。おそらく目にする機会はなかったと考えられる。

注

(1) Rowland Elzea, ed., *The Correspondence Between Samuel Bancroft, Jr. and Charles Fairfax Murray, 1892-1916*, Delaware Art Museum Occasional Paper, No.2 (Wilmington: Delaware Art Museum, 1980); Rowland Elzea, 'Samuel Bancroft: Pre-Raphaelite Collector', *Collecting the Pre-Raphaelites: the Anglo-American Enchantment*, ed. Margaretta

Frederick Watson (Aldershott: Ashgate, 1997), pp. 25-31.

(2) Foreword by Richard Lanathen, *The Bradywine Heritage* (Brandywine River Museum, 1971), p.10.

(3) Williard S. Morse and Gertrude Brinckle, compiled, *Howard Pyle: A Record of his Illustrations and Writings* (Wilmington: Wilmington Society of the Fine Arts, 1921; reprinted Detroit: Singing Tree Press, 1969), p. iii.

(4) 村木 明 『ハワード　パイル』〈アメリカンノスタルジア 4〉, PARCO 出版, 1976; 村木 明『アメリカ近代美術の展開 ― コマーシャルアートの黄金時代を築いた作家たち』 美術公論社, 1978, pp. 49 – 76.

(5) *Ladies of Shalott: A Victorian Masterpiece and Its Contexts* (Providence, Rhode Island: Department of Art, Brown University, 1985), p.137; Henry C. Pitz, *Howard Pyle: Writer, Illustrator, Founder of the Brandywine School* (New York: Bramhall House, 1965), pp.52, 168. 本書の pp. 88－89 に挟まれたカラーページに『シャロットの女』の 1 ページが複製されている。

(6) 髙宮利行『アーサー王伝説万華鏡』(中央公論社, 1995), pp. 180 - 212 ; 髙宮利行『アーサー王物語の魅力 ― ケルトから漱石へ』(秀文インターナショナル, 1999), pp.166 - 240.

(7) *Ladies of Shalott*, pp. 120, 144-45, 162.

(8) *Ladies of Shalott*, p.96.

(9) *Ladies of Shalott*, pp.139, 128.

(10) Walter Crane, *An Artist's Reminiscences* (London: Methuen, 1907), p.401: cf. Isobel Spencer, *Walter Crane* (London: Studio Vista, 1975), p.177.

(11) Spencer, p. 33: cf. 髙宮利行「ショロットの女の図像学・序説」,『言語文化』3 (1985) 特集・アーサー王, pp. 71 – 81.

(12) Crane, *An Artisit's Reminiscences*, p.45.